想像力によるメディア論

仲田　誠

1．はじめに

先代の金馬の十八番に『薮入り』という噺があってお店に奉公入りしていた一人息子が薮入りで両親の待つ長屋に帰省するという話である。ちょっと見ない間にずいぶん立派になった子供に職人かたぎの親はうれしいやら照れ臭いやらで息子の前でひどくばか丁寧な挨拶をしておかみさんに笑われてしまう。もっとも笑いながらおかみさんも喜んでいるのである。しかし、立派になった息子を見てもやはり親ばかの種はつきないもので銭湯にいった息子の留守の間に財布の中味をつい見てしまう。思わぬ大金が中に入っているのを見た父親は銭湯から帰った息子の横面をなぐりつける。「悪いことをして盗んだ金だろう」という親に息子は泣きながらことの真相をうちあける。「盗んだんじゃない。盗んだんじゃない。ネズミを捕って交番に持っていったら懸賞に当たってもらったんだ。」ペスト防止のために国が賞金をかけてそれが運良く手に入った。お店の主が子供がこんな大金をもっていてはいけないからとしばらく預かって薮入りにあわせて持たせてくれたのだという。「このお金でおとっつあん、おっかさんを喜ばせな」と。これを聞いた親曰く、「そうか、ありがたいご主人だな。これからも主人を大切にしな。なにしろ忠のおかげだ。」

文楽、円生という名人が逝って、馬生、小南という個性派もいなくなって近ごろの落語はとんとおもしろくなくなったが、名人が語る噺にはフィクションでありながらまさに生命が宿るような感があって、『薮入り』というどちらかというとB級的な作品も名人の手にかかるとそこに形容のしがたい不思議な現実感が生まれた。名人がいなくなり、寄席も消え、残った寄席も中途半端なコンサートホールのような感を呈するものばかりになると、熊さん、八っつあんの生命が宿るような場ももはやありえないのである。薮入りということば自体がとっくに廃語だし、忠とネズミのチュウを結びつける「不届きだが」面白いという江戸っ子的複合感覚がわからなくては「忠のおかげ」という地口落ちに含まれる意味複合体もわからない。つまり、落ちになりようもない。しかし、ともあれ、フィクションを経由して不思議なリアリティが生まれるという経験はわれわれの記憶にとどまっているのである。この記憶は志ん生のテープを聞くたびに、『猫忠』の変化の場面で先代・三木助が高座で宙返りをきって、円生が顔をしかめたなどという一見瑣末な逸話を思い出すたびに不思議に筆者にはよみがえるのである。

筆者には論理的な思考様式だけでなく、比喩による連想的な思考様式、イメージの連鎖の様なものもわれわれの内面のどこかに組みこまれていて、それがわれわれの思考や感情の膨らみ、時によれば、精神の健全さを保証してくれているのではないかという仮説ないし理論、あるいはリアリティを保証するものとしてのフィクションというような仮説があって、あえてこのような前口上を並べてはなしを始めているのだが、ともかく、比喩にしても、イメージの連鎖にしてもそれが感覚的なものであり、体験されてはじめて意味を

もつものである以上、このような一見主観的な語り方が必要とされるのである。

リアリティとは不思議なものでリアリティがリアリティ感をもつためにはしばしば何らかのかたちでフィクションがそこに介在するようにも思える。（フィクションはともかくリアリティに関して今ここで厳密な定義を下すことは難しい。定義が難しいからこそここでの議論が必要だともいえる。）江戸っ子なるものがどこそこの個別的具体的な熊さん、八っつあんの要素の抽出体の集合であると説明するのは一見合理的なようだが、これは論理的アポリアをふくむ[1]。むしろ、フィクショナルな存在ではあるが江戸っ子の粋を集めた『たがや』（『たがや』でなくて『大工調べ』の棟梁でももちろんいい）の主人公を通じて個別的な熊さん、八っつあんに江戸っ子の本質が具現化するようにも思える。リアリティはフィクションを必要とするわけだ。

同じことは武士階級にも言える。

丸谷才一は赤穂浪士の行動様式と歌舞伎や狂言の伝統との関係を論じる文脈で、江戸時代の武士が危難に際した時の行動様式は、歌舞伎の影響をかなり受けていたのではないかという。「もともと歌舞伎には町人の眼で見た武士の理想化ないし様式化という側面がある以上、今度はその理想化や様式化の型にのっとつて武士が行動する（場合もある）ことになるのは自然ななりゆきだった[2]。」要するに、武士階級にも自分たちの表向きのイデオロギーである封建主義的道徳を本音として受け入れるためには、演劇的なフィクションが必要だったということだが、ここでもリアリティはフィクションを必要とするわけだ。

おそらく農民一揆の記憶が現実の歴史の中で継承されるためにもフィクションを経由することが必要ではなかったか。尾崎秀樹は、安政六年の伊那の「南山騒動」のおりに主導者の一人が講談師に変装し『佐倉義民伝』を語り歩くことで組織の強化に努めたというエピソードを紹介している[3]。

フィクションが行動のモデルとなると同時にリアリティ感（場合によれば不安感につながるリアリティ）の根拠となるという現象は江戸時代や近代初期の日本に限られた現象だとも思えない。

モランは、現代のフランスの一都市オルレアンに発生した流言、うわさの実態を調査し、共有された中世的な神話、集団幻想がこのうわさの根源にあることを明らかにした。フィクションが西欧の現代都市というリアリティの基底を深層から揺さぶっているわけである[4]。

フィクションは災害時などの特殊な状況で流言等の形をとってリアリティの中に混在することもある。1989年から1990年にかけてアメリカのミズーリ州周辺地域で発生した地震の予言騒ぎは、自然科学者（動物学の博士号所有者）が独自の理論を駆使して地震を「予知」したことが原因だった。「予知」情報を出した科学者当人にとっても、これを信じた人々にとっても、科学というリアリティはこの場合フィクションを増殖させる触媒のようなものでしかなかった[5]。

江戸川河口の埋め立て地にあるディズニーランドへ出かけてシンデレラのお城（だったか）のミステリーツアーに参加すると奇妙な現象を目撃する。子供染みた冒険ごっこに参加した人の中から幸運な人が選ばれて魔法使いと闘うとご褒美に商品がもらえる。この運動会の参加賞的なメダルをもらっていい歳をした好青年、ヤングレデイが喜色満面のしかし一種不可思議（ミステリアス）な笑みを浮かべるのである。なるほどたしかにこれはミステリーツアーだ。

フィクションはいわゆるコギャルのリアリティ感の根拠すら支える。テレビの座談会で「なんでそんな格好をするのか」と聞かれた一人の少女は「表面ばかり見ないで、内面の本当の私を見て欲しい」と答えていた。内と外の奇妙なコントラスト（フィクションの構造）が彼女や彼女の同族の存在感や現実感を支えている。このフィクションはコギャルだけでなく、若い世代全体に広く共有されているものらしい。

われわれの比喩的連想はいささか拡散しすぎた感もある。以下では、問題の対象をもう少ししぼって、フィクションとリアリティの関係を拡大すると同時に両者の境界を曖昧なものにしつつもあるメディア現象に当面の間関心を向けて問題を考察していきたい。

2．メディア現象におけるフィクションとリアリティ

1）ティファニーで朝食は食べられない

東京葛飾柴又とは訪ねて見ればちょっとだけレトロな感じがするだけの普通の門前町だが、『男はつらいよ』のイメージがそこに混入すると不思議なリアリティ感が生まれる。映画のワーンシーンで登場する上野松坂屋の包み紙すらがフィクションの中では独特のリアリティ感を感じさせるものとして現われる。「さくら（寅の妹）もやはり京成電車に乗って上野広小路で買い物をするのか。」さくらの結婚式の披露宴が行われた川魚料理屋は実在の料亭で虚構と現実がそこでは混在化している。「たこ社長がここで一杯飲ったんだろう。そのうちこちらも一度あがってみるか。」『東京ラブストーリー』の最終回の舞台となった愛媛県の田舎町の小学校にはいまだにわざわざロケ現場みたさに遠くから訪ねてくる人がいるようで、リアリティがその場合はフィクションの感動を追体験する契機となっている。フィクションなしのリアリティのかたちではこの小学校はどこにでもある過疎の町の平凡な小学校だ。

『マディソン郡の橋』の舞台となった現場（橋）の土が土産物として売られ、播磨屋橋見たさに土佐の高知をわざわざ訪ねてロマンもなにもないのにがっかりし（ちょっと古いか）、ニューヨークのティファニーの店で朝食を食べたいと観光客が押し寄せ、リアリティとフィクションの混在化現象を拾いあげればまさにきりがない。しかし、フィクションとリアリティがどこでどうこんがらがり混在化しているかは事例の豊富さとは裏腹に依然としてよくわからないままなのである。フィクション抜きではある種の現実感は成立しえないということはたしかだが、なぜそうなのかは皆目検討がつかないというところだ。

筆者の個人的体験を紹介すれば、京都大覚寺大仙院の「なべのふた」体験がある。大仙院の住職はユーモラスな講話で有名な人だが筆者が中学時代に聞いた講話は枯山水の庭園が見える部屋でのものだった（ここは修学旅行のコースになっている）。和尚曰く、この部屋は歴史的に有名な人がおおぜい訪れて庭を眺めた部屋だ。それそこの君、君が座っているところは昔豊臣秀吉公が座った場所だ。隣の君、そこは違う。そこは太閤殿下が昼飯の鍋の蓋を置いたところだ。わーつと笑った瞬間、秀吉となべのふたと大仙院の「いまそこの場所」が一つに結びついて不思議なリアリティ感が生まれた。なべぶたの場所に居合わせた当人にとっては自分がなべぶたか、なべぶたが自分なのか一瞬判じがたくなる瞬間が現われたのだ。

さて、フィクションとリアリティの関連性をめぐる疑問はそのまま、フィクションとリ

アリティがメディアの中でどう融合され、どう増殖するかという問題につながるわけだが、メディア研究とはよく考えて見れば、われわれがいままで見てきたような疑問や驚き、感動によって動機づけを与えられてきたとも言えるのである。

1977年から1978年にかけてアメリカのウッドストック世代、つまり1960年台後半に10代から20代だった人たちに対して行われた意識調査の結果が雑誌『ユリイカ』の中で諸岡敏行によって紹介されている[6]。この中での一つの質問「あなたが六〇年代に、あこがれたり影響をうけたりした人物はだれですか」という質問に、次のような答えが返ってきている（複数回答）。ビートルズ、76%、ボブ・ディラン、72%、ジョン・F・ケネディ、62%、マーティン・ルーサー・キング、62%、ジョン・レノン、59%、ラルフ・ネーダー、49%、ロバート・F・ケネディ、47%、ジョン・バエズ、44%、ユージン・マッカーシー、43%、ジャニス・ジョップリン、42%。著名な政治家や人権活動家よりもポップ・スターが上位に食い込んでいることを知っても、大衆文化の影響下で育った世代は当然だと思うかもしれない。「ジャニスは人生のあっけなさを知っていた。だから、その一瞬一瞬の価値を知っていた。わたしはいまでも彼女の誕生日を祝い、彼女の命日に泣く[7]」というように個人や世代の時代感覚（のくぎり）を特定のポップ・スターの軌跡と結びつけるのもごく自然なことであろう。しかし、こうしたフィクションの領域の英雄たちが自我モデルを提供しているというのもあらためて考えて見れば不思議なはなしではある。ビートルズの演出された髪形やフィクショナルな恋愛のフレーズが自分たちのリアリティ感を高め、生き方のモデルにもなる。これは確かだとしてもなぜそうなのかはここでもやはりわからない。

こうしたフィクションとリアリティの混在化という現象に対する驚き、メディア的フィクションが人々の現実感を変え、アイデンティティのありかたに影響を及ぼすという現象に対する驚きや違和感は、マス・メディア研究の初期の研究ではそのまま研究の主発点そのものにもなっている。たとえば、「利用満足」に関する「古典的研究」とされるヘルツォークのソープ・オペラの研究ではメロドラマという白日夢が主婦の現実感覚を侵食し、彼女らのセルフイメージの中に虚構と現実の奇妙な合成物を蓄積させていくことへの率直な驚きの表明がある[8]。この驚きはたとえば、50年後の時点で、松田聖子の帝王切開のエピソードをめぐってわれわれが経験した驚きというか形容のしょうがない一種の感慨に近いものがあったのではないか。松田聖子が子供を帝王切開で産んだと聞いた若い主婦層がその必要もないのに「わたしも聖子ちゃんみたいに帝王切開で産んでみたいんです」と多数申し出たというはなしである。ばかばかしいはなしだが、メディアのリアリティ構成をめぐる一つの秘密めいたものがここには隠されている。

2）メディア研究におけるリアリティ論

われわれはリアリティとフィクションの関係からはなしを進めて、メディアの問題の中でさらにこの問題を深く分析してみようと思っているわけだが、メディア研究の枠の中で見ればこれは古くて新しい問題ということになるであろう。つまり、フィクションとリアリティの問題はしばしばこの領域で探求されてきはしたが、同時にある点からの考察はほとんど抜け落ちてきたということである。

全体的に見てメディア研究で欠けてきた点は、フィクションがなぜある種のリアリティ感を生みだす契機となるかという問題である。その意味では、メディア研究はフィクショ

ンの問題にしても、フィクションとリアリティの関係にしても問題の本質を迂回してきたと言っても良いであろう。

これはメディアをめぐる関心のかなりの側面がおそらくはフィクションとリアリティの関係性に関する関心や危機感をきっかけに高まったという状況（ヘルツォークの研究が示唆するように）を考えれば不思議なことである。ヘルツォークの議論の中でもフィクションに侵食されるリアリティという実態を前にしての嫌悪感や戸惑いは感じられても、フィクションそのものがどのような理由によってリアリティの中に浸透するのかという点の追及はほとんどない。この奇妙な問題の欠落について考えていくためにはメディア研究における中心的な問題設定の図式そのものに目を向ける必要があろう。この中心的な問題設定とは実はリアリティをめぐる議論にほかならないわけである。

3）メディアとリアリティの「構成」

最近のメディア研究においてめだつ一つの特徴はメディアを現実を構成する装置としてとらえ、どのようなかたちでメディアがリアリティを構成するか、さまざま事例を取り上げながら、現実構成という視点からメディアをとらえようとする切り口だろう。[91]

ある意味ではメディア研究は昔からリアリティの構成の問題を中心的テーマとして設定してきたわけだが、過去と現在の状況が違うのはメディアが現実をゆがめるという前提が希薄になってきたところだと言えるかもしれない。それはともかく、最近のメディアによる現実構成という問題に関する文献や論文を読むと、参考にはなるが（注9で紹介したHannigan のオゾン「ホール」というイメージ自体がドラマティックに構成されたものという視点などはたいへん面白い）、一方、本質的な点に関する疑問も残る。それはなによりも、なぜ、現実の「構成」という点が問題になるのかはっきりしないという点だ。これは曖昧なままに素朴なリアリティそのもの（メディアによって汚染されない純粋なものとして）が前提とされているか、メディアの現実「構成」作用の具体的メカニズムは迂回するかたちで「構成」の結果としての表層的・断片的現象が問題になってきたからだともいえる。いずれにせよ、今のところ、「構成」という視点を通じてはフィクションとリアリティの問題の核心に迫りようがないのだが、逆に言えば、この「構成」という問題の設定の曖昧さそのものの中に問題の本質をたどる方向が隠されているともいえるのだ。

「構成」ということばの背後には、価値判断を避け、なおかつ、メディアの働きを問題にしようとする姿勢、現実とはなにかが（どのような点から評価すべきかが）わからなくなってきているという危機感、あるいは暗黙のうちに何らかの理想状態（メディアのあるべき姿等々）を前提とし、メディアの作用や役割をその暗黙の視座から批判的に眺めようとする動機など（この場合、「構成」は現実の「歪曲」とほとんど同じ意味になる）が見え隠れするわけだが、いずれにしても、ここでは、フィクションはリアリティの残余としてひどく曖昧に了解されるか、リアリティやリアリティ感を損なうバイアスや虚構、「嘘」としてしか理解されていないことになる。こうした姿勢ではリアリティとフィクションの関係に関する考察は表層的なものに留まらざるを得ない。（フィクションがなぜ現実世界の人間を魅了するのかという問題はこうした姿勢ではわからないままだろう、したがって、フィクションないしフィクションとリアリティの融合体がなぜ人々に影響を及ぼすのかという点もブラックボックスにいれられたままになる。）前置きが長くなったが、メ

ディア研究においてリアリティの「構成」がどのようなかたちで問題になってきているか以下で具体的に検討してみよう。

メディア研究におけるリアリティをめぐる問題設定の特徴を端的なかたちで示しているものとして以下のWeimannの図式をあげることができる。[10] この図式の内容をやや詳しく見ていくことで、われわれはメディア研究におけるリアリティの（曖昧な）定義、あるいは定義の欠如（定義といってもここでは論理学や言語学的な定義ではなく、なぜリアリティが問題にされるかが明瞭に了解され、あるいは意識化されていることをいう）についてその実態がつかめるであろう。

Weimannはメディアの現実構成をめぐる現象を理解するための図式として以下のような（図1）The Double Core Modelを提唱する。[11] この図式によると、リアリティは「リアリティ」、「CMR（constructed mediated reality）」（われわれはこれを以下では「メディア的リアリティ」ないし「メディアリアリティ」とも呼ぶことにする）、「PMR（perceived mediated reality）」（以下では「知覚されたリアリティ」ないし「知覚リアリティ」とも呼ぶ）の三つのリアリティから成立する。順序としてはまず、「リアリティ」があり、「CMR」がそこから構成され、さらにオーディエンスがそれを知覚、了解することで「PMR」が成立するという流れである。「PMR」として成立したリアリティが「リアリティ」そのものを変容させるという流れもこの図式の中に含められているようだが、実際には「リアリティ」があり、それを受けてメディアが「メディア的リアリティ」を構成し、さらにそこから受け手の「知覚されたリアリティ」が成立するという流れにWeimannの主要な関心は向かっている。その意味では、議題設定機能仮説や培養効果理論にも共通するオーソドックスなリアリティ論、あるいはリアリティの構成論、さらには、メディア観がここでは展開されているわけである。

図1　（WeimannのThe Double Core Modelの概要）

リアリティ→CMR（constructed mediated reality）→PMR（perceived mediated reality）

この図式の中味やこの図式を基盤にして展開される具体的な問題について少しWeimannの説明を聞いてみよう。以下にその要点を示す。[12]

ア）現実生活のある側面がcommunicatorによって利用されて「CMR」をつくる。これはニュース、フィクションドラマ、新聞記事、映画、音楽の形式をとる。「CMR」は「リアリティ」やなんらかのrealistic elementに基づくが、「リアリティ」そのものとは異なる。「PMR」（オーディエンスがリアリティとして受け入れ、知覚しているもの）は選択的知覚、接触、記憶というプロセスを通じてCMRのある側面をリアリティとして採用することで成立する。

イ）私たちは客観的なリアリティの世界そのものにaccurateに関係することはできない。世界に対するわれわれの接触は選択的で限定的なものである。われわれは文化的、私的な意味の世界を二次的に作りだす。その場合マス・コミュニケーションが提供する経験からわれわれは集合的にわれわれの意味を形成する。

ウ）「CMR」を代表する具体的な事例の一つとして挙げることができるのは湾岸戦争であ

る。湾岸戦争の時、Weimannは、Haifaの住民としてこの戦争を経験したという(著者はイスラエル、Haifa University のコミュニケーション論の教授)。Haifaはイラクのスカッド・ミサイルのターゲットの一つであった。その時の体験は奇妙なものだったという。シェルターの中に入ってスカッド・ミサイルの来襲に備える住民にとっては、戦争はもっぱら「CMR」として体験されるメディア的な現実であった。彼らはシェルターの中でアトランタからのCNNの放送を見ていたのである。何が起こっているかをアトランタからの映像で見ていた。戦争の後、放送が歪められ、操作され、検閲を受けたものであることがわかったとWeimannは言う。この経験を下敷きにWeimannは「CMR」について次のように言う。〜私たちは世界と自分たち自身と私たちの過去と現在と未来と、テレビを通して一日5〜8時間ものあいだコミュニケートしている。私たちはテレビ的現実の中を生きている。

エ)「CMR」をめぐる現象としてWeimannが重視するものには、ERなどの医療ドラマやMTVなどがある。いずれも、Weimannによれば、受け手のリアリティ感ないしリアリティ観を歪めるという点で重視されるべきものなのである。医療ドラマについてはいくつかの研究事例などを参照しながらWeimannは次のように問題点を指摘する。〜CPR(Cardiopulmonary resuscitation＝緊急医療などで行われる心肺の蘇生措置)について医療ドラマは数字をインフレーションさせている。1994年から1995年にかけて放送されたERとChicago Hope、1995放送のRescue 911ではCPR後の生存率は非常に高くて平均で77%、Rescue 911では100%という高い数字だが、実際の数字は40%にしかすぎない。ここにあるのはCPRの魔術・魔法といったテレビ描写である。また、MTVもコマーシャルと番組の境目をこわす、現実を夢のようなイメージのものとして提示する、さらには、既成の性役割をめぐるステレオタイプをまきちらす等という点で現実を歪めて描写しているのだ。[13]

4)メディア研究におけるリアリティ論の問題点

さて、Weimannの以上のような説明は一見妥当であるように思えるが(リアリティとフィクションの関係を根本的に問い直すという問題意識をもたない人にはずっと妥当なものであり続けるだろうが)、実は次のような重要な問題をもっている。湾岸戦争ではリアリティは一体どこにあったのか、医療ドラマ以前にあるリアリティとは何なのか、半分コマーシャルであり半分プロモーションヴィデオのようなMTVがなぜ一見強固に見えるリアリティを侵食できるのか?

Weimannの指摘した問題(医療ドラマの影響にしても、MTVが曖昧にするリアリティと空想の境目にしても)は重大な問題ではあるが、「リアリティ」をメディアが「メディア的リアリティ」として構成するあるいは歪曲化するというWeimann的図式のもとでは実は問題の核心は宙に浮いている。したがって、なぜ現実離れしたフィクションに受け手が影響されるのかという肝心な点を説明しようがないのである。考えてみれば、そもそも医療ドラマ以前にはCPRをめぐる「リアリティ」などはどこにも存在しないように思える。医療関係者はともかく一般の人にとっては、CPRなどということばはまったくなじみのないものであろう。だとすれば、CPRをめぐるリアリティとはメディア以前には実質的にはなかったと言ってもよい。医療ドラマが登場し、CPRをめぐる人間ドラマや緊迫感が視聴者の関心を引き付けるようになって初めてCPRをめぐる「リアリティ」そのものが出

現したともいえる。CPRの成功率が異常に高いという批判もここで初めて可能になる。CPRの「実際の」成功率40%という数字は実はそれ自体ではなんとも評価のしようがない数字である。高いといえば高い、低いといえば低い。医療ドラマ以前にあるのは評価のしようがない、ほとんどの人はまったく関心をもたない「ただの数字」である。しかし、一方でここにあるのは「メディア的リアリティ」だけで「リアリティ」そのものは最初から不在という見方もできない。関心の有無に関らず、CPRは現実の実態であり、それをめぐって繰り広げられる人間模様も確かに存在する。CPRの成功率40%という数字も実際に存在する。むしろここにあるのは「リアリティ」と「メディア的リアリティ」が渾然一体化しているという状況であり、その意味で「リアリティ」をそれ自体独立したものとして定義することの難しさである。

CPRをめぐる個別的治療の実態、統計的に集約されたCPRの成功率・失敗率、医療そのものに対する全般的な信頼、私的生活はいざ知らず治療の場面では患者の救命や治療に全力を尽くすという医療関係者の「無私」の姿勢（という神話）、最新の医療技術に対する素朴な驚嘆、にもかかわらず救急治療という極限的な状況にいつ巻き込まれるかもわからないという生身の人間の脆弱をめぐる「寄る辺なさ」、こうした個別的現象や想像力、場合によれば先行ドラマの記憶（『ベン・ケーシー』の記憶）などが「リアリティ」や「メディア的リアリティ」を「構成」するリアルな（場合によればフィクショナルな）素材として現実的に存在する。しかし、それは医療ドラマというフィクション（しかもドラマとしてフィクションが成功した場合に限って）が存在してはじめて「リアリティ」ないし「メディア的リアリティ」として融合する。医療ドラマというフィクショナルな核を中心に現実の素材が融合される（しかし、何によって融合されるのであろうか？）。

湾岸戦争の問題もリアリティとフィクションの関係は同様に複雑である。もし、Weimannが身を隠していたシェルターの外に出てスカッド・ミサイルをじかに目撃したとしても彼は湾岸戦争を「リアリティ」として体験したことになるのか。一方、テレビの画面を通してわれわれが見ていた現実＝「モニター」の中で捉えられたトマホーク・ミサイルのピンポイント攻撃、赤外線モニターの中で暗視されたイラク地上軍が蒙った「効率的」で徹底的でコンピュータゲームのような破壊、これらを目撃したことが「リアリティ」を体験したという意味になるのか。幾度となく繰り返された多国籍軍司令部による記者会見、イラクに残った「敵国」アメリカのCNNの映像が伝えた多国籍軍によるバクダッドの爆撃の模様、それを迎え撃つイラクの対空砲火の映像、こうした個別的事実を目撃したことは、「メディア的リアリティ」なのか「リアリティ」なのか、あるいは「知覚されたリアリティ」なのか。CPRに関しては医療ドラマというフィクションが存在していてそれが「リアリティ」の断片を融合させる核になっているようにも思える。しかし、湾岸戦争の場合は、核になるようなものすら見当たらないのだ。

5）歪められた「リアリティ」

上で述べたようにメディア研究ではリアリティとフィクションの関係については正面から扱われることは少なかったものの、「歪められたリアリティ」という視点はある意味でメディア研究に強い動機づけを与え続ける問題の原点であった。この「歪められたリアリティ」の内容についてメディア研究の蓄積の中からわれわれはいくつもの具体例を引きだ

すことができる。以下にその典型的な事例を並べてみよう。このことによってフィクションとリアリティの関係性をめぐる考察をさらに別の角度から考えてみたい。そのためにはどのようにリアリティが歪められているのかある程度詳しく検討する必要があるだろう。

ア）安易な運命観と虚構と現実の混同

ヘルツォークが「利用満足」に関する「古典的研究」（既に部分的には紹介した）で明らかにした受け手の実態とは「歪められたリアリティ」に躍らされ、リアリティそのものへの視点を歪めてしまう弱い受け手像にほかならなかった[14]。ヘルツォークはラジオの連続ドラマ（ソープ・オペラ）の聴取実態を調査したのであるが、この調査結果から明らかになった聴取の実状を一言でいえば、現実と虚構の混同という状況であった。聴取者は、ドラマが架空の内容であるにもかかわらず、そこから「実用的」な知識やヒントを得ていた。泣く、驚く、幸せな気持ちになるという「情緒的な聞き方」や「白昼夢、代理体験、空想」に加えて、聴取者はドラマからさまざまなことを学んでいた。具体的には、ものごとを説明してくれる、ものの言い方を教えてくれる、適切な行動パターンを教えてくれるというかたちでドラマから日常生活に役立つ（と聴取者は思っている）アドバイス、生活の知恵を得ていたのである。こうした知恵やアドバイスの「有効性」は、ドラマの非現実的でステレオタイプ的な性格を考えるとおのずからその意味が明らかになる。聴取者はその「弱さ」故に「日常生活に役立つ」と錯覚した知恵やアドバイスによってむしろ現実不適応に陥るのであった。この現実不適応とは端的には「安易な運命観」の採用といったかたちをとって現われるものであった。

イ）社会的問題への志向性の欠如とステレオタイプ化された人物描写

ヘルツォーク同様、主婦向けのソープ・オペラを研究したアルンハイムにとっては、「メディア的リアリティ」＝「歪められたリアリティ」とは社会的な問題への志向性を欠き、また、人間描写がステレオタイプ化されたラジオドラマの内容そのものであった[15]。アルンヘイムが分析した連続ラジオ・ドラマ（1941年にアメリカで放送された）は次のような点で非現実的な世界であった。問題は登場人物の個人的世界の中のみで繰り広げられ、問題発生の理由も、社会・経済・政治的状況によってよりも、個人の欠点や堕落によってもたらされることが多い。また、登場人物もステレオタイプ化し、「良い人間」、「悪い人間」、「弱い人間」の三種類のタイプの人間が登場する。聴取者がこうした世界に安住するかぎり、自分の真の姿を認識する努力は放棄されたままであり、「悪事は結果として報われない」という「良識」や、「ハッピー・エンドが自然と訪れる」という「希望」も疑われないまま残る。かくして、聴取者は自分のプライベイトな世界の中にとどまり続け、自己と社会の繋がりを確認しようとする努力やあらたな価値を発見しようという努力は消えうせる。

ウ）画一的世界観

ソープオペラがラジオの時代でもテレビの時代でも一貫して社会的な問題への視点を排除してきたというのはメディア研究がしばしば分析の対象としてきた点であった。さらに、ソープオペラの登場人物のステレオ・タイプ的描写もメディア研究者が注目してきた点であった。Smytheらが分析した50年代のアメリカのテレビドラマの世界もステレオ・タイプ的描写にあふれた人物が跋扈する世界であった[16]。ライトはこの50年代のテレビドラマの内容を次のように整理する。～登場人物で男性が女性よりも多く、若年者と年配の人は

少なく、経営者や専門的職業といったホワイトカラーは多く、対照的に平凡なホワイトカラーとブルーカラーは少ない。また、白人が多く、黒人は少ない。登場人物の大半は法律を順守し、健康で精神的にも正常である。こうしたメディア的現実描写の特徴はもっと後に培養効果研究の文脈で明らかにされたテレビドラマの現実描写とほとんど重なるものでもあった。その意味でライトの言う通り、アメリカのテレビドラマの世界は長い間まったく変化のない世界だったのだ。[17] まさに、この画一性こそ「歪められたリアリティ」の具体的内容でもあるわけだ。

エ）経験の断片化

ここで紹介しているのはいずれもメディア研究の古典と呼びうるものだが、メディア体験（ポピュラー音楽の聴取）を分析し、そこに経験の断片化という実態を見つけたアドルノの分析もこの古典の一画を占めるものである。アドルノは『音楽社会学序説』[18]で音楽の聴取という場面をとりあげて人間の経験が部分化、断片化されている問題を批判的に指摘したが、これは同時にメディア体験、さらにはメディア的リアリティの批判にもなるのである。

この論文でのアドルノの主張の概要は次の通りである。～音楽を聴取する側にも聴取能力という点でさまざまなレベルがある。「エキスパート」にとっては、構造的聴取が可能であり、複雑な音楽であっても、部分、部分を（過去、現在、未来の各瞬間の統合でもある）聴覚を通じて統合し、そこからまとまった一つの意味を析出させることができる。また、ヴェーベルンの弦楽三重奏曲の第二楽章のように、しっかりした構成の支えをもたぬ自由な曲にはじめて出くわしてもその形式の各部をいうことができる。一方、より低いレベルにある聴取者とって、音楽聴取とは（苛酷に合理的な自己保存の営みを強制される人間にとっての）反理性的、情緒的楽しみ、本能の解放であり、音楽そのものも快適な慰安の手段にしか過ぎず、音楽はまとまりのある全体ではなく、刺激の源泉、情緒的要素にとどまる。

オ）アメリカ的幻想

Sari Thomas は「合衆国では個人の違いと個人が自分の運命を支配できるという考え方に人気がある」という指摘を行っているが、これもやはりメディア的リアリティの本質と関ってくる点である。[19] Thomas によれば、アメリカのテレビの世界には社会的モービリティに関する次のような神話が認められるが、これも上のようなアメリカ的人生観と呼応するものなのであろう。～ 1.上層への通路が開かれている　2.だれもが達成できる　3.トップへのぼりつめることはそんなにグレートなことではない（お金では幸福は買えない、愛があれば生きていける、富や権力はひとを堕落させる）。

6）ネガとポジの反転現象（歪められたリアリティの逆説）

上で述べられていることは、すべて正当な批判であるように見えて、しかし、われわれの関心に即していえば、問題の本質からある意味で確実にずれている。このことはおそらく次のような点と関係する。～上のような視点にあっては、何らかの理想的状態が一方で既に前提とされていて（虚構と現実の違いを見抜く批判的意識が重要、社会的問題への関心がわれわれにとって本当に重大な問題、なるべく社会の実態を客観的に描くことが良質のドラマ、本物の音楽は本物の審美眼をもった人間にしかわからない、幻想を排除したド

ラマこそ本物等々）リアリティとはその理想状態との「距離」を図る尺度でしかない（ように見える）。したがって、上のような図式の中ではリアリティはいわば固定された価値観と連動して存在していて、フィクションとリアリティのダイナミックなそしてある意味では曖昧な関係性は見落とされているように思える。

上のようなメディア批判が一見有効なメディア（的リアリティ）批判であるように見えながら実のところ多くの場合表層的な批判にしかなりえていないのはおそらくリアリティとフィクションの関係を迂回したところで議論が成立しているためであろう。したがって、肝心なところ、つまり、なぜそのような「歪曲された」フィクションに人々が影響されるのかがわからないし、批判点がそのままメディア的リアリティの肯定点にも転化しうるという不思議な状況に関してもまったく気づかれないままである。フィクションの中に配置されている材料の配置を替え、フィクションとリアリティが接合する位置をずらし、フィクション、メディア的リアリティの「質」を変えることで、あるいは作品が置かれている文脈をずらすことで、批判点は思いがけず唐突に反対のベクトルをもった評価にも反転しうる。少なくともこうした視点の転換でメディア的リアリティに対する批判は曖昧で両義的なものになる。

われわれは以下でこうした批判を評価に転化し、批判の曖昧性を表面に浮かび上がらせる作業を部分的に試みてみよう。

ア）たとえば、鶴見俊輔は戦後日本のマンガの中に含まれている意味（おそらく潜在的な意味）を次のように読み解く[20]。～「がきデカ」（山上たつひこ作）の興味は金と性にしかない。きわめて無責任で破廉恥なのががきデカだ(筆者もそう思う)。しかし、これは実に戦後の日本の東南アジアへの姿勢を映している鏡ではないか、あくことのない経済上の売り込みにしか関心のない日本人の姿ではないか。

この鶴見の指摘に共感するならば、がきデカというばかばかしい虚構にリアリティ（知覚的リアリティ）を感じるという状況こそリアルな状況ということになる。したがって、ここでは、虚構と現実の境目の消失に惑わされる姿に共感しうる姿勢こそがリアリティだということにもなる。

イ）主体性を失うことが受け手の現実認識（リアリティのありかをみきわめる）を歪めるという指摘がヘルツォークのメディア批判の中に見え隠れしているが、メディアは時には主体性の意識すらメディア的リアリティの「商品」として前面に出すこともある。たとえば、大塚英志は『少年ジャンプ』の魅力を次の点に見る～『少年ジャンプ』の基本コンセプトである＜努力、友情、勝利＞は、社会が子供たちに要求している規範と見事に一致するという。『少年ジャンプ』の強さはこの点にあり、子供たちを取り囲む規範をコミックの形を借りて肯定することで読者の社会化の促進材料になるのだという[21]。

結局、ここでは表層的な「主体性の重視」というモチーフに共感することがメディアの論理にからめ捕られてしまうことを意味する（『少年ジャンプ』の愛読者なら多分そうは思わないだろうが）。『少年ジャンプ』の中に置かれれば主体性もその意味を変容させるわけだ。（月刊誌『少年』の愛読者であった幼少の筆者は『ストップ！にいちゃん』を愛読するとともにわち三平の軍記物の愛読者でもあった。軍国主義者ではない筆者が坂井三郎の手記を読んだりするのはこうした昔の漫画体験が関係しているのかもしれない。ともかく、『ストップ！にいちゃん』もわち三平の軍記物もともに少年の努力、勇気、勝利（困難

への挑戦）をモチーフとするものであった。こうした子供時代の漫画体験が筆者の内面のある部分を形作っているのは確かだと思うが、しかし、自分でもなかなかその中味を分析しようがない。一体、『少年ジャンプ』の主体性というモチーフは子供たちのその後にどのような影響を与えてきたのだろうか。）

ウ）部分こそリアリティのありか

アドルノの大衆文化批判の眼目は（上の記述でも示唆されているように）大衆文化の規格化、標準化、断片化という点に置かれている。たとえば、"On Popular Music"[22] "Einleitung in die Musiksoziologie"[23] という二つの論文の中でもアドルノは、ポピュラー・ミュージックの基本的特性が規格化という点にあり、規格化は曲の全体的構造だけでなく、細部にも及んでいると批判する。部分が独立化・断片化し、規格化された曲を聞くことで受け手の中にも同様の規格化された反応が生じる。ここから、受け手の自立性、自由、個性の消滅という事態が生じる。

しかし、現代においてわれわれは自分の自我や内面自体が統合性を失い、断片化された現実生活を漂っているという思いを強く持っていないか。だとすれば、たとえば、大衆文化やメディア的リアリティの中に表現されている「率直な」生や現実の断片化こそわれわれにとってはリアリティそのものだとも言える。シェイフアは、ロック音楽の特徴の一つを、聴き手が瞬間の中に含まれた自分自身に集中するところにあると説く。個々の聴き手がゆがんだ音の中に突然自分自身の声を聞く、音楽の中に自分の生の断片が反映されていることを知る。[24] その意味では、まやかしの統合性をフィクションのかたちでリアリティの中に混入させることこそここではむしろリアリティの歪みにつながるということにもなる。

エ）全くのフィクションがもつリアリティ感

Sari Thomas のいうような「幻想」はたしかに、リアリティないしメディア的リアリティを現実感の乏しい類型化したものにおしとどめる作用をもつかもしれない。しかし、逆にある種の「幻想」がメディア的リアリティの成立の上で欠かせない（場合がある）ことも事実だ。そしてこのフィクショナル化されたリアリティを経由しなければ見えてこないリアリティ、現実といったものが一方にはある。西部劇に例をとれば、かっての「正当派」西部劇に黒人や東洋人（西部開拓の歴史において苦力は重要な意味をもったはずだ）がおよそ出てこないのはリアルでないといえばまさにリアルではない。また、『OK 牧場の決闘』のクレメンタインのような女性が頻繁に登場するのもフィクショナルな設定だといえばその通りであろう。たしかに、こうした意味では西部劇はリアリティそのものでないかもしれない。しかし、同時に、このフィクショナルな部分こそ何らかのリアリティがそこを経由して育まれる条件だったこともたしかなのだ。1920年代における西部開拓劇＝西部劇登場の背後には、西部劇的なフィクションを必要とする時代的願望があったと指摘したのは佐藤忠男である。佐藤忠男はこの点について次のように言う。～1920年代における西部劇登場の背景にはアメリカ的精神の分裂があった。東部のこちこちのピューリタニズムと大都市のアメリカニズム（にわか成り金、イタリア系・ポーランド系などの新移民、金銭万能、ジャズとダンスなど）の分裂である。西部劇にはこのような分裂を食い止め、開拓時代の初心に帰ろうという願望のようなものが作用していた。[25] そのような視点で見れば西部劇というフィクショナルな世界の中でアメリカのある種のアイデンティティが育まれてきたこともたしかなのだ。黒人やインディアン（ネイティヴ・アメリカン）など少数派

の発言力強化は60年代の西部劇のありようを変えたことだろうし、また、この変化が同時に社会的現実にインパクトを及ぼしたという図式がここでは想定されるのである。忠臣蔵の事例を思いだして見れば分かりやすいだろうが、国民のアイデンティティという問題をめぐっても、リアリティとフィクションはどうやらわかちがたく結びついているのだ。

こうした例をあげていけばまったくきりがないが、要は、メディアがリアリティを歪曲する際に経由するフィクション化、ないし「脚色化」は同時に現実認識を深める手段として肯定的な意味も持ちうるということである。フィクションそれ自体、あるいはフィクションとリアリティの融合化現象はリアリティを構成する場合に「歪曲」という方向にも向いうるし、逆に「隠れたリアリティの発掘」、「新たなリアリティのありか」という評価の方向にも向いうるわけである。結局、「歪められたリアリティ」という視点もリアリティの「構成」の方向が何らかの理想状況と重なるならば、「リアリティの深化」という視点に容易に転じうるわけだ。

どうやら今のところわれわれに言えることは、リアリティはフィクションと深い部分で重なり合っていて、その重なり合いの「加減」＝「質」そのものがリアリティ（メディア的リアリティ）を「歪められたリアリティ」にもし、「深められたリアリティ」にもするということだけらしい。

3．フィクションとリアリティの「質」

ここでわれわれは本来ならばフィクションそのものの考察に重点を移して問題を掘り下げなければならないが紙幅の都合もあるので思いきって問題を圧縮し、フィクションやメディア的リアリティの「質」のありかたに目を向け、あわせて、リアリティとフィクションのどのような「融合」や「構成」が一方で「歪められたリアリティ」を生みだし、他方で「深められたリアリティ」を生みだすのか考えてみたい。そもそも、われわれのここでの考察は、フィクションの「質」に感動し、同時にリアリティの「質」に違和感を感じることによって始まったものだった。さらに、ここまでの考察で部分的に明らかになっているように、フィクションとリアリティを相互に切り離して別個に考えるのは深い落とし穴があるかもしれないという思いもある。フィクションそのものへの考察を後回しにして「質」の問題を見ていくことは逆に問題の核心に迫る近道なのかもしれないのだ。ともかく、ここでもフィクションとリアリティの関係を問い直すということが問題の中心となる。

ついでに言っておくが筆者はそもそもどのようなメディア的リアリティもまたメディア的フィクションも同等の価値をもつ、あるいは「質」を評価することは主観の問題なので学問としては不可能という考え方をとらない。つまり、その意味で価値相対論的な考え方には与しない。しかし、同時に一元的な価値というものさしをふりかざしてリアリティやフィクションを特定に枠の中に押し込めようという考え方にも与しない。どちらもリアリティや人間そのものに関する視点を歪めてしまうように思うのだ。一方は、ニヒリズムに陥り、一方は独断主義に陥る。これは半分は後に示すように精神病理学の知見などに基づく「客観的」な根拠に依拠するもので、半分は筆者の体験や主観的印象による（筆者としてはこうした主観がそれなりの普遍性、あるいはかなりの普遍性をもつものであることを信じているが）ものである。

「質」の問題を考える上で重要な示唆を与えてくれる知見や論点をメディアの問題に限らずより広い研究領域（といっても筆者の関心や問題意識も関係して実際にはかなり問題領域は限定されている）から探しだすことにしよう。（言い訳がましいが、以下のような論点や知見をメディアの問題そのものと結びつけるにはもう少し時間が必要なこともたしかだ。筆者の頭の中では今のところ、以下のようなミクロなレベル＝精神医学的なあるいは認識論的な問題領域＝とマクロなレベル＝メディア研究に代表される＝は「比喩的」なかたちでしか結びついていない。木村敏の指摘や中村雄二郎の指摘に二つのレベルをつなぐ糸が見えているようにも思えるが、ここではいろいろな事情で深く論じることはできない。ともかく、今の段階ではフィクションとリアリティの関係をさまざま角度から検討しなおすことがなによりも重要なことなのだ。）

ア）「自明性」という認識の「質」

人間の知覚や認識の「質」についてしばしば貴重な示唆を与えてくれるのが精神病理学の知見だが、その中でもブランケンブルクの主張は、われわれが価値相対主義（ニヒリズム）と一元的価値観（市場経済至上主義とか情報通信技術の神格化とか）の両極に分断されがちな中で一つの「中庸」や「常識」につながる洞察を与えてくれるものであろう。[26]

ブランケンブルクは20歳のアンネ・ラウという女店員（分裂病と診断された）の症状を検討する中で次のようなことを発見する。この患者に欠けているのは「あたりまえであること」、「自明であること」、「常識」をつかむ認識のある側面だ。アンネ・ラウ自身の表現を使えば彼女は次のようなことがわからないのである。～＜私に欠けているのは何でしょう。ほんのちょっとしたこと、ほんとにおかしなこと、大切なこと、それがなければ生きていけないようなこと・・・。＞＜私に欠けているのは、きっと自然な自明性さということなのでしょう。＞＜だれでも、どうふるまうかを知っているはずです。だれもが道筋を、考え方を持っています。動作とか人間らしさとか対人関係とか、そこにはすべてルールがあって、だれもがそれを守っているのです。でも私にはそのルールがまだはっきりわからないのです。私には基本が欠けていたのです。・・・＞ブランケンブルクによれば、彼女のこうした症状の背後にあるのは、健常者が共有する共通の自明性、生活世界の中に含まれる前論理的な生活実践の根というものの欠如なのである。[27]

木村敏が「もしも精神分裂病の症状をただの一言で言い表すとするならば、「常識の解体」だ」と言いきっているように、[28]常識の問題はわれわれの認識の「質」を議論する上で必要不可欠な点であるように思える。おそらく「質」ということばではくくれないもっと深い認識のメカニズムがここで関っているようにも思えるが、一方でとりあえず「質」ということばしかここで使用できないところに問題の深さがのぞいているようにも思える。常識や自明性は自然科学的な（数量化でき装置で測定できるような）客観的ななにものかではない。同時にこれは単なる社会の人為的な約束事だと決めつけてしまえる代物でもない。われわれは認識の「質」という言葉の中にあまりに重要なものを放り込んできたようにも思えるし、逆に「質」というある意味ではひどく軽視されがちなことばの中にわれわれの認識の隠された真相が埋もれているようにも思えるのである。仮に常識や自明性をフィクショナルなものとして位置づけるならばフィクションのある面の作用や働き、あるいはフィクションの働かせ方が人間の認識の深い本質的な部分に根差していることが推測されるようにも思える。

イ）主観の価値的、美的側面

ブランケンブルクによると、アンネ・ラウに欠けているのは、論理的認識、抽象的な認識ではない。彼女は、知能テストでは、計算や一般的知識はよくできた。ところが、一方で彼女は、表情理解、象徴理解、常識（コモンセンス）の問題、格言、寓話などの理解は明らかに劣っていて、その一部にはほとんど答えられなかったのである。[29] これと同様の指摘は他の研究者からも聞かれる。[30]

中村雄二郎は象徴、格言、寓話が理解できなくなる分裂病の症状と多様な感覚与件を統覚的に総合する働きが失われる離人病の症状をつなぐ糸としてヴィコの思想に手掛かりをもとめ、人間に備わっているトピカという認識能力に注目する。中村によれば、トピカはコモンセンスを基盤とするレトリックの能力と深く関係すると思われるのもので、コモンセンス＝共通感覚を間にはさんで比喩と本質的なところで結びつくものなのである。[31]

別のところでは中村は次のように問題の核心に迫る発言をしている。中村は『言語起源論』におけるルソーの次のようなことばに注目する。「はじめに人々が言葉を発したのは詩のかたちであった。人々が道のものに出会うとき、理性に先だって情念がはたらき、対象がイメージとしてとらえられるものであるから、概念的な言葉よりも前に比喩的な言葉が生まれる。[32]」このルソーの説を踏まえて中村はヤーコブソンやソシュールの議論をここに結びつける。「一つのパラダイム（範列関係）のなかで、意味と意味、語と語とは類似や連想の関係によって互いに結びついている。パラダイムはそのような隠れた、無意識的な約束事のシステムであり、つまりは共同感情の場でもある。・・・他方、ルソーのいう欲求、あるいは必要の言葉は、結合軸の優勢なことばとしてとらえることができる。・・・結合軸が優勢になり、統合の面が強くなるにしたがって、言葉は概念化し、論理化し、事物を外がわから明示することができるようになるが、そのことばは人間と人間を同化させるよりも相互に客体化し、対立させることになる。[33]」

中村が『共通感覚論』でその重要性を指摘したヴィーコ自身は次のようなことを語っている。「詩的叙述法が散文よりも先に、人間本来の必然性によって生まれた。それはちょうど、合理的に説かれた普遍、即ち哲学的なものが散文的な話し方によって生まれてきたよりももっと以前に想像的な普遍である神話伝説が同じく人間本性の必然性によって生まれていたのと同様である。[34]」

詩にしても比喩にしても諺にしても科学的認識、論理的認識が重要な位置を占める現代の社会にあっては部分的な役割しか与えられていない、それこそ「趣味的な」「文学的な」あるいは想像力に属する周辺的な問題でしかない。しかし、ここでも「質」ということばで簡単にかたづけられがちな問題の中に人間の認識や精神の深い半分忘却された本質が潜んでいることをわれわれは気づかされるのである。木村敏によると、離人病患者はテレビドラマの場面のつながりがわからなくなるのであった。[35] まだ、部分的なものでしかないが、メディア的リアリティと人間の認識のある重要な側面をつなぐ本質的な糸がここに見えているように筆者には思えるのである。

ウ）想像力の質

木村敏は精神病（特に分裂病における）における妄想はトピカの異常＝個別感覚の背後ではたらいていてそれらを総合している共通感覚の働きの故障＝であると主張する。[36] 分裂病の症状の背後に一種の情報の統合能力の欠陥があることは、多くの精神病関連の研究者

の口から聞かれることであるが[37]、妄想を想像力の一種として位置づけるならば、情報の統合性は想像力の「質」の問題を大きく左右するとわれわれは問題を読み替えることができるのではないか。分裂病者の病状は比喩という想像力の「質」が強く関与すると思われるある種の認識作用のありかたに関するものであった。ここから、想像力やフィクションの「質」が統合的な認識作用と深く関り、さらにそれはある種の比喩的な発想能力、レトリックの能力と結びついているというように「比喩的」連想を繰り広げてもさほど飛躍した連想ともいえないのではないかと筆者は考えている。

ともかく、統合的な認識作用や比喩的な認識作用が分裂病患者の想像力の「質」を大きく左右してることは確定的なことであるように思える。

たとえば、昼田は分裂病患者の妄想には「関連体系」や「関連機能」の障害の問題が強く関連してるという。～われわれの「世界」は言葉を介して整合的に構造化されている一つの統合された全体。世界の「世界性」、世界の統一と「意味」を可能にしているのはわれわれのもつ「関連機能」。分裂病の急性期においては、この関連機能の障害が増幅されるために「世界」は断片化し、意味を失っていく[38]。

宮本忠雄は分裂病者の言語世界の構造を「サンタグム的構造が貧困であるのにパラディグム的連関が異常に肥大している[39]」ものという視点からとらえる。昼田はこれを踏まえて分裂病の妄想をパラディグム的連想の異常な連合によって説明する試みを行っている[40]。

こうした問題に関して一つの「統合的な」明瞭な説明をわれわれに与えれてくれるのはやはり木村敏であろう。木村敏は、『あいだ』で次のようにいう[41]。

～人間個体も生物一般と同様に、自らの欲求や願望に基づいて環境全体から固有の状況を切り取ってくるのだが、その際認知対象としての状況要因と行為目標としての状況要因との関係は生物のように直接的な生命欲求によって条件付けられるのではなく、両者間にトゥーレ・フォン・ユクスキュルのいう「自由な構想力」がはさみこまれてくる。

～幼児期にこの構想力を十分に発達されることのできなかった人は、後に何らかのストレス状況に直面した時、これを気分や情緒のレベルで処理することができない。・・・そのような人は共生期にも活動していた通りの身体レベルで、いわば共生期への「退行」によって対処しようとする。

～ある種の精神病や神経症の患者は、現実への対処にさいして十分な構想力をはたらかせることができず、それにともなって相手のことばに含まれる譬喩的な含意を無視してそれを文字通りに理解してしまう「具象化傾向」を示したり、多義的なとらえかたの可能な抽象的な質問には答えられなかったりすることが多い。

ここまで来るとメディア的リアリティないしメディア的想像力の「質」の問題まであと一歩という気がする。ともかく、ここで考えてきた人間の知覚や認識の「質」、想像力の質の問題は、トピカ、共通感覚、木村のいう「自由な構想力」を間に挟むならば、さらにそれを越えて人間の認識の本質的な側面、あるいは文学的な比喩的な認識機能、作用のある側面とも結びつくように思える。この視点の延長線上にはわれわれが本稿の主題としてきたメディア的リアリティの問題、そこにおけるフィクションとリアリティの融合という問題も見えているように思えるのだ。

ただここで一つだけ蛇足になるかもしれないが付け加えると、「自由な構想力」の質、あるいは比喩的認識の質はどの時代社会でも同じ、一元的尺度に基づくのではなく、時代

や文化によって共有される範囲があるのではないかという点である。「自由な構想力」が木村の言うように人間の認識の本質に関る部分を構成するとしても、そこには何らかの変動する部分があるのではないかということである。たとえば、われわれ（健常者）は次のような恐らくパラディグム的連想の異常な連合によると思われる分裂病患者の想像力には共鳴しえない。分裂病の患者の思考は一つの典型として次のような形で展開する。「処女マリアは処女である。私は処女である。だから私は処女マリアである。」[42] これは述語のレベルでの連想が働いてそこから主語が導きだされるという展開だが、こうした論理は詩的連想を除いてわれわれは共有しえない。これが妄想とされるのはこれが容認しえない論理であり、あるいは特殊な想像だからだ（こうして見ると論理も想像も意外と紙一重のところにあるわけだ）。しかるに、木村敏によれば（アリエッティの議論を踏まえている）、未開人の論理ではこれは決して異常な論理でも想像でもない。これは「古論理」とでも呼ばれるもので、「あのインディアンは早く走る」、「牡鹿は早く走る」、「したがってあのインディアンは牡鹿である」という論理ないし推理は未開人にとっては普通である。[43] 恐らくこの境界線は時代とともに文化とともに動いていく。この時代とともに変動し、他者と共有することで成立している想像力の質ないし枠を健常者はどこかでつかみ、分裂病患者はつかみえない、そこが健常と病的状況の分かれ目なのだろう。この分かれ目に関して筆者が現段階でいえることはあまりないが、一つだけ興味深いデータを紹介すると、ロールシャッハテストで健常者の反応は紋切り型タイプと希有反応の中間を占めるという点だ。ロールシャッハテストにおいて分裂病患者は健常者が示すような典型的反応をごくわずかしか示さない。一方、ここで当たり前の典型的な反応ばかり示すのは紋切り型の人間で独創的な反応が乏しいことになる。まさに、両極端でなく、「中庸」こそ健常者の占める位置であるらしい。[44]

武野俊弥は、分裂病者の妄想と宗教的な信仰とはしばしばそれ自体では区別が難しいという。たとえば、分裂病者の妄想と現象的に類似した幻想をシベリアのシャーマンは心に抱く。両者が完全に違う点はシャーマンはみずからの変性意識に対して客観的な意識を抱くことができるが、分裂病患者にはそれができないということだ。だから、シャーマンは自分の内部の（幻想の）声に対して主体的に話しかけることができるのに、分裂病患者は受動的に内部の声に耳を傾けるだけだ。[45] ただの主観でもないしただの客観でもないどこかあるところ、そこに居ることで内的外的二つの声に耳を傾けることができるあるどこか、そこが健常者と病的人間を分かつ分岐点なのかもしれない。ロールシャッハテストのテストの場合と同様、「中庸」としてしか表現できないようなどこか、そこのどこかに認識の「質」（この場合は健全さ）を保証する何らかの手掛かりがあるように思える。

エ）メディア的想像力の「質」

さて、この章では精神医学の知見の紹介を中心に想像力やフィクションの質といった問題について考えてきたが、このあとは当然こうした知見をメディア的想像力の問題と結びつけて論じる必要がある。ただ、残念なことに予定枚数や筆者の考察の進み具合その他の関係でこの点については次の機会に譲らざるをえない（願わくばかば焼きの匂いだけかがされてだまされたようなものだという勿れ）。しかし、ここまでの論述の流れで言うと、メディア的想像力でもやはり「質」が様々な点で問題となってくる（はずな）のである。

本稿の書き出しは落語の話から始めたが、落語的想像力でもやはりうまいへた（「質」）はた

しかにあって、これはある程度以上の鑑識眼がある人なら誰でも認めることである（上でアドルノの議論をだしにして批判的な見解を提示したがこれも、筆者にはそれだけの音楽の審美眼がないというそれだけのはなしなのかもしれない）。三遊亭円朝の怪談噺を聞いた人はまるでその場面を自分で体験してるかのような気持ちになったというはなしが伝わっているが、たしかに落語の名人の噺を聞くとそのような体験をすることがある。先代の文楽の『明け烏』は絶品で甘納豆を食べる場面でも、聞いている客が後で甘納豆を自分でも食べたくなるような名演だったと言われているが、同じ場面を二線級が演じても「絵にならず」ただ「口開けて甘納豆を放り込んでだらしがない」という印象が残るだけである。不思議なことに名人と言われる噺家でもスタジオでただマイクの前に向かって語った（つまり聞いている客がいない状態）ではこのような名人芸は感じられない。落語の生命は「間」といわれるが、落語の「質」はおそらくこの「間」と深いところで連動している。

最近黒沢明の『天国と地獄』を久しぶりにビデオで見て筋の運びや人物の構成等といった点でひどく感動したが、このような作品を見るとやはりメディア的想像力にも「質」という点からの考察は欠かせないのではないかと思うのである（黒沢の作品をひとこと「質」という表現で片付けてしまうのはいささか単純だが）。

とはいっても、「質」を決定する要因がなんであるかを明確に指摘するのは現時点では至難のわざである。「質」の違いは確かにあるがそれを説明する適切な言葉が見当たらないのだ。山崎正和は現在の演劇を支配する演劇論は独我論的な背景をもつものであるという。これは、表現とは本質的に、孤独な自我がイデアを模倣するときに成立するもの、表現は孤独な自我の単独の営み、鑑賞者はあくまでも二次的な存在としてもっぱらその表現行為を追体験するものという考えかたに立つものである。[46] 山崎も言うようにこうした考え方に縛られている限り、歌舞伎を始めとする日本の伝統演劇の特徴である演劇の二重性～歌舞伎の中で観客は物語の現実性に感動するとともに、その芝居らしさに興じる、そうした二重的な演劇空間を味わっている～を理解するのは至難の業ということになろう。

演劇的フィクションの「質」の問題について考えるためにはやはり近代の人間論や世界観そのものを見直すというかなり根本的なところから問題を再検討しなければならないように思えるのだが、上で紹介した精神医学や認識論の議論の中にもそうしたパラダイムの転換（大げさな表現かもしれないが）を求めるような方向性が見えているようにも思えるのである。

枚数がはるかにオーバーして本稿はここで終えなければならないが、能の『井筒』という演目の後場のシーンをとりあげて多少演劇的な終わり方＝想像力を喚起する終わり方＝を試みてみよう。これは旅の僧が奈良の在原寺というところで里の女に会う、ところがその里の女と思ったのは実は200年前にこの世を去っている紀有常の娘の霊だったというはなしである。後場では旅の僧はワキとして物陰でシテ、里の女、実は紀有常の娘の霊が200年前の恋人の思い出、つまり在原の業平の思いを切々と語るという場面をじっと見ている。木下順二はこの場面はワキ（シテの語りをリアルなものとして聞いている）の存在によってフィクションでありながらひどくリアルなのだという。[47] これはなぜなのだろうか。それからついでにもう一つ、冒頭でとりあげた『藪入り』の下げ、あれを聞いた途端にすーっとどこかに気持ちが吸い込まれる気がするのはなぜなのだろうか。もう一つついでに言うと小学生低学年の娘が勝手に一人で「悲しい話」を想像力でこしらえながらなぜ

かそのうちに本当に悲しくなって泣いてしまうというのはなぜなのだろうか。

4．今後の課題

さて、言い残したこと、最低限の記述で済ませてしまっている問題、ほとんど取り上げることができなかった問題、いいさしただけで済ませてしまった問題など、次回に回さざるをえなかった問題も多いわけだが、しかし、今回の執筆部分に限って見ても目的のかなりの部分〜リアリティとフィクションの関係についてあらためて問い直すということ〜は達成できたのではないかと思っている。その意味では（問題提起としては）一定の目的は達しえたのではないだろうかと自負している。リアリティとフィクションの関係について検討すべき問題は山積みになっているものの、山積みになっているものの中でどこにどのようなかたちで重要な問題が埋もれているかはある程度の検討がついたようにも思う。そしてこの重要な問題の中にはリアリティそのものの本質的な側面がフィクション抜きでは成立しえないのではないかという常識から言えば驚くべき問題や仮説も含まれている。ただ、これも、人間の知覚の中には既に何らかのフィクションないし想像力が織り込まれているという筆者が別のところで試みた錯視や失認症の研究と結びつけることができるならば、驚きは驚きのままとして、人間をめぐるより実践的な問題（離人病や現実感の喪失、「ヴァーチャル・リアリティ」の中で変容する現実感といった問題など）にもつながるはずである。いずれにしても想像力の「質」の問題（メディア的想像力の「質」の問題も当然含めて）の深い掘り下げは次回の大きな課題である。

注

(1) 廣松渉曰く、人がもし抽象という手法で何らかの概念を形成しようとしてもこれは不可能である。たとえば、「犬」という概念の形成に当たってはポチ、ジョン等という個別的犬を集めてくればそれですむようだが、しかし、なぜポチ、ジョンを集めて来られるのか、なぜミケ、タマを省いてポチ、ジョンだけを集めてこられるのか、それは実は既にポチ、ジョンを集めてくる場面で何は犬であり、何は犬でないかを知っているからだ。廣松渉、1988、『哲学入門一歩手前』、講談社現代新書、114-118頁。

(2) 丸谷才一、1984、『忠臣蔵とは何か』、講談社、82-83頁。

(3) 尾崎秀樹、1983、『英雄伝説』、旺文社文庫、127頁。この点については林基、1953、「百姓一揆」、『歴史学評論』1953年5月、第162号に詳しい記述がある。

(4) Edgar Morin, 1969, *La Rumeur D'Orléans*, Éditions du Seuil, Paris. エドガール・モラン、1973、『オルレアンのうわさ』（杉山光信訳）、みすず。

(5) この現象については以下の文献参照。Farley, John E., 1993,"Earthquake Hysteria, Before and After: A Survey and Follow-Up On Public Response to the Browning Forecast," *International Journal of Mass Emergencies and Disasters, November* 1993,Vol. 11, No.3: 305-321. Farley, John E., 1998, *Earthquake Fears, Predictions, and Preparations in Mid-America*, Southern Illinois Univ. Press.

(6) 諸岡敏行、1991、「「ウッドストック」その後…」、『ユリイカ』、1991年11月号、第23巻12号、198-205頁。オリジナルなデータは、WOODSTOCK CENSUS: The Nation-wide Survey of the Sixties Generation, by Rex Weiner and Deanne Stillman, The Viking Press, New York, 1979. による。

(7) 諸岡敏行、1991、203頁。ジャニスに関する発言は調査対象者からのもの。

(8) H. Herzog, 1944, "What Do We Really Know About Daytime Serial Listeners?," in P.F. Lazarsfeld and

F.N. Stanton (eds.), *Radio Research 1942-1943*, 1944 , Duell, Sloan and Peace (Reprinted ed., 1979, Arno Press.)

(9) たとえば、Hannigan は環境問題がメディア（など）によって構成された問題であることをオゾン・ホールや酸性雨の問題などをとりあげて説明する。～ John A. Hannigan, 1995, *Environmental Sociology*, Routledge, London.（著者は Toronto 大学の社会学の associate professor）～。酸性雨の問題は19世紀にすでに問題になっていたが、1960年代までは対処がなされなかったのはなぜか。この点に「構成」という問題が関る。たとえば、オゾン「ホール」というイメージ自体もリアリティというよりは状況をよりドラマティックで理解しやすいものにするために科学的に構成（constructed）されたものである（Hannigan, 前掲文献、p.3）。

(10) Gabriel Weimann, 2000, *Communicating Unreality*, *Sage*.

(11) このモデルは Whetmore, T., 1991, *Mediamerica: Form, content, and consequence of mass communication* (4th ed.), Belmont, CA: Wadsworth. からの示唆を受けて作った著者のモデルの修正版。図１はさらに筆者＝仲田が圧縮して根幹だけ示したもの。

(12) Weimann 前掲文献10頁以下。

(13) Weimann は MTV の現実描写について以下の論文を参照している。Kinder, M. 1984, "Music Video and the spectator: Television, ideology, and dream," *Film Quarterly*, 34, 2-15. Aufderheide, P., 1986, "Music Videos: The look of the sound," *J. of Comm.*, 36 (1), 57-78. など。

(14) H. Herzog, 1944, "What Do We Really Know About Daytime Serial Listeners?," in P.F. Lazarsfeld and F.N. Stanton (eds.), *Radio Research 1942-1943*, 1944 , Duell, Sloan and Peace (Reprinted ed., 1979, Arno Press.)

(15) R. Arnheim, 1944, "The World of Daytime Serials," in P.F. Lazarsfeld and F.N. Stnton (eds.), *Radio Research 1942-1943*, 1944, Duell, Sloan and Peace (Reprinted ed., 1979, Arno Press), pp.34-85.

(16 Smythe, D.W., 1953, Three Years of New York Television, Monitoring Study 6 (Urbana, IL: National Association of Educational and Broadcasters), 1953. Smythe の研究の内容については次の論文を参考にした。Wright, C.R., 1986, *Mass Communicaion* (third ed.), Random House, N.Y.

(17) Wright 前掲文献、131頁。

(18) T.W. Adorno, 1962, *Einleitung in die Musiksoziologie*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main. アドルノ（渡辺健、高辻知義訳）、1970、「音楽社会学序説」、音楽之友社（もともとは1961、1962年にかけてのフランクフルト大学での講義）。

(19) Sari Thomas, 1995, "Myths In and About Television," in John Downing, Ali Mohammadi and Annabelle Sreberny-Mohammadi (eds.), *Questioning the Media* (2nd ed.), Sage. (chap 26)

(20) 鶴見俊輔、1984、「戦後日本の大衆文化」、岩波、79頁。

(21) 大塚英志、1987、「まんがの構造」、弓立社、56頁。

一四九

(22) Adorno, T.W., 1941, "On Popular Music," in Max Horkheimer (herausgegeben), *Zeitschrift für Zozialforshung* (Jahrgang 9, 1941), 17-48.

(23) Adorno, T.W., 1962, *Einleitung in die Musiksoziologie*, *Suhrkamp* Verlag, Frankfurt am Main.「音楽社会学序説」（渡辺健、高辻知義訳）、1970、音楽の友社。

(24) Schafer, William, 1972, Rock *Music*, Ausurg Publishing House, Minneapolis, Minnesota. シェイファ（三井徹訳）、1975、「ロックの意味」、草思社。邦訳、82-83頁。

(25) 佐藤忠男、1976、「映画をどう見るか」、講談社現代新書。

(26) Wolfgang Blankenburg, 1971, *Der Verlust der natuerlichen Selbstverständlichkeit. Ein Beitrag zur Psychopathologie symptomarmer Schizophrenien*, Ferdinand Enke Verlag, Stuttgart. W. ブランケンブルク（木

村敏他訳)、1978、『自明性の喪失』、みすず書房。

(27) ブランケンブルク前掲文献、邦訳185頁。

(28) 木村敏、1973、『異常の構造』、講談社現代新書、54頁。

(29) ブランケンブルク前掲文献、邦訳70頁。

(30) 松林武之、円山一俊、長井曜子、武田雅俊、1998、「慢性分裂病者にみられる比喩の表現」、『臨床精神医学』、27 (5)、601-608頁。Harow, M. and Miller, J. G., 1980, "Schizophrenic Thought Disorders and Impaired Perspective," *Journal of Abnormal Psychology*, Vol.89, No.6, 717-727. など。

(31) 中村雄二郎、1979、『共通感覚論』、岩波。

(32) ルソー『言語起源論』第3章。引用は、中村雄二郎、1997、『感性の覚醒』、岩波書店による。

(33) 中村雄二郎、1997、『感性の覚醒』、岩波書店、231-232頁。

(34) Giambattista Vico, 1774, *Principj di Scienza Nouva*. ヴィーコ(清水純一訳)、1979、『新しい学』(世界の名著33)、中央公論、邦訳225頁。

(35) 木村敏、1981、「「間」と個人」、剣持武彦、西山松之助、清家清、小倉朗、木村敏、1981、『日本人と「間」』、講談社、203-249頁。

(36) 木村敏、『心の病理を考える』、岩波新書、20-21頁。

(37) たとえば、丹羽真一、1996、「心の病気と脳障害の間」、『現代思想』1996年、vol.24-2, 191-201頁。斉藤治、丹羽真一、平松謙一、亀山知道、福田正人、1985、「精神分裂病の認知障害」、『臨床精神医学』、14 (6)、891-906頁。Place, E.J.S. andGilmore, G.C., 1980, "Perceptual Organization in Schizophrenia," *Journal of Abnormal Psychology*, Vol.89, No.3, 409-418. 御領謙、1985、「認知理論と認知障害」、『臨床精神医学』14 (6)、883 889頁。松井三枝、倉知正佳、「精神分裂病」、1976、『神経心理学と精神医学』(日本生物学的精神医学会編)、学会出版センター、171-189頁。など

(38) 昼田源四郎、1989、『分裂病の行動特性』、金剛出版、129頁。

(39) 宮本忠雄、1994、『言語と妄想』、平凡社、277頁。

(40) 昼田源四郎前掲文献、197頁。

(41) 木村敏、1988、『あいだ』、弘文堂、96-100頁。

(42) 宮本忠雄前掲文献、265頁。

(43) 木村敏、1973、『異常の構造』、講談社現代新書、126頁。

(44) 昼田源四郎前掲文献、48頁。

(45) 武野俊弥、1994、『分裂病の神話』、新曜社、43頁。

(46) 山崎正和、1988、『演技する精神』、中公文庫、342頁。

(47) 加藤周一、木下順二、丸山真男、竹田清子編、1984、『日本文化のかくれた形』、岩波、60頁。

(48) 人間の認識や知覚、知の問題を含めた考察＝フィクションやフィクションとリアリティの関係性についての＝は、以下の論文等(いずれも拙稿)でとりあげている。ただし、これらは人間の認識とメディア的リアリティの問題の関連性を深く掘り下げるという点では必ずしも十分ではない。人間の認識の中に深く食い込んでいると思われるフィクションという視点からメディア的リアリティの問題を掘り下げるのは次回の課題になろう。「虚像としての他者」、1987、『松山商大論集』第38巻2号、107-131頁。「告発された大衆文化―"大衆文化"論争の行方」、1990、『松山大学論集』(大学昇格40周年記念号)、703-728頁。「情報社会と自己実現(2)―現実感覚回復のために」、1996、『群馬大学社会情報学部研究論集』第2巻、27-49頁。「モノ的情報・コト的情報―情報行動の人間学的地平」、1998、『群馬大学社会情報学部研究論集』第5巻、41-59頁。「脳と情報社会～還元論を越えて」、1999、『社会情報学研究』、第3号、127-138頁。など。

A Preliminary Study of the Role of Imagination in the Media-Reality

Makoto NAKADA

The aim of this paper is to examine the role of imagination in the so-called media reality. According to the dominant perspectives of media theories, media reality is a peculiar or problematic kind of reality. Many authors of this field tend to insist that media reality is distorted in various ways and that this kind of reality provides the audience with the false or illusional images of the "true" realities. Gabriel Weimann is one of those authors who have a deep interest in the function of this sort of media reality. In one of his books Weimann tried to analyze the negative effectives of media reality upon the the audiece's perception of the realiries or even their own self-images. For example the famous TV drama ER present some ditorted images of medical treatments. According to the data that Weimann referred to in his book, the percentage of "success" of CPR is more than 70% in the drama ER or several similar dramas,while the true percentage of this medical treatment is just 40%. Weimann argued that ER is a illusional drama in this respect and that this kind of distortion of realities is very "popular" phenomena in the TV dramas or even the total TV world. In spite of the validity or persuasiveness in the surface level, this kind of arguments including Weimann's one seem to fail to grasp the true relationship between the reality and the media reality. Even the objective figures of success of CPR in the dramas and the real medical treatments don't have any practical meanings, if we try to understand the true or false percentages of success of CPR seperately. The 40% of the true success of CPR doesn't have any particular meaning for itself, until it is compared with the imaginative figures of exciting TV dramas. In short the reality can't be separeted from the imagination or dramatic reality in this case. To put this in a different way reality and media reality rest on each other and the influence of TV dramas or other contents of mass media is derived from this fusion of reality and media reality. In most of media studies this kind of interdependence of reality and media reality seem to be neglected. However, as the case of the Gulf War suggested, the extent of interdependence of two kinds of realities appear to be deepening more and more today. Thus the more detailed consideration into the relationship between reality and media reality or between dramatic imagination and the media effects seems to be urgent theme for scholars of media studies as well as the the scholars of other disciplines who are interested in the role of imagination or fantasies in the media world and the "true" world.